

第3節 備後南部地域の発掘遺跡からみた備後国府

はじめに

近年は県内各地の考古学的な調査が進みさまざまな成果がみられる。特に長期にわたる継続的な調査が行われ大きな成果が上がっている。広島大学による帝釈峡遺跡群の調査は継続中で、県北の原始時代の解明が行われている。草戸千軒町遺跡調査研究所による中世集落跡の発掘は既に完掘し保存と展示公開が行われている。安芸国分寺跡も長年わたる発掘成果から史跡整備が行われ一段落を迎えた。備後国府跡の発掘解明もすでに30数年を経過し、次第に大きな成果が上がっている。本報告書は長年にわたる発掘成果を整理し、現段階での成果をまとめたものである。遺跡が市街地の地下に埋もれているため、思うように発掘出来ないところもあり残念ながら国府の政庁はまだ検出されていない。しかし、これまでの成果を勘案するとこの地が備後国府跡である可能性は非常に高い。備南地域には神辺平野を始め各地に多数の遺跡が埋もれているが、発掘調査が行われた遺跡はまだ僅かで今後の調査にかかっているが、これまでの発掘成果をもとに次第に解明がなされている。小稿は備後南部地域でこれまでに発掘調査された古代の遺跡、とりわけ発掘調査が進んでいる寺院跡の発掘成果をもとに、この調査報告書とは別の視点から備後国府について考えてみた。

1. 備南における官衙遺跡等の調査

研究史の概要

備後国府の研究史については本報告書1分冊にまとめられている。改めて云うまでもなく所在地論は戦前から諸説があり大きく分けると府中説と神辺説がある。前者は『和名類聚抄』の「在葦田郡」の記載から現府中市とする説で、すでに江戸時代の地誌類にもみられるが、1954年には豊元国が「芸備地方史研究」に発表している。後者は高垣不敏の神辺町湯野「方八町」の地名からの考察で、1953年に『備後国府考』を出版し広く知られるようになった。その後神辺から府中への移動説もでていたが、いずれにしても神辺で国府跡を検証する調査が必要であった。

方八町国府説と神辺平野の発掘調査

高垣説の根拠は平野部西方の湯野に「方八町」の地名を残す1町四方の地点があり、これを国府の中心である国庁（西国庁と推定）として八町四方の府域の復元案を示した。備後国分寺跡と西方の小山池廃寺の南に八町四方の府域を想定したものであるが、主として地名や道路・畦畔等の地割りからの推定によるもので、考古学的な遺構は検出されていない。詳細な研究と論述がなされているが、地名に加え備後国分寺の所在と小山池廃寺を国分尼寺、方八町の西方の低丘陵山王山等を『続日本紀』記載の「茨城」と比定して説が補強されている。ただ、八町の復元は当時国府跡研究の典型とされていた周防国府の八町説に依拠して復元されたものと考えられる。

この神辺平野は、現国分寺の西側を流れる堂々川をはさんで大きく西側の大宮地域と東側の御領地域に分けることが出来る。水田地帯であったこの地域も1970年代になると開発が始まり、区画整理事業が計画された。高垣説の方八町推定地が含まれるため事前に確認調査を実施し、国庁の推定地域を中心に2年にわたりトレンチ調査したが、古代の遺構・遺物は殆ど出土せず、国府跡の確認は出来なかった。また、方八町の地名についても調査したが出典は明らかにできなかった。一部検

第10章 備後国府の検討

出した畦や溝などと 3000 分の 1 の地図から時期は不明であるが条理区画の復元はできた。方八町説は条理区画に影響されたとも考えることができる。

その後八町説南の大宮地域で、また堂々川東の御領地域で県教育委員会や町教育委員会などによる数次にわたる調査が行われているが、弥生時代の環濠を含む集落遺跡や古墳時代の遺跡などは明らかになっているが、古代の遺跡も国府に関連する遺構も確認されていない。兼代地区で掘立柱建物群が検出されているが、古墳時代後期の集落に伴う居館と推定されている。また、井原線に伴う調査や最近の国道 313 道路改良事業に伴い(財)広島県教育事業団が継続して行っており、平野部を横断するように調査されているが、弥生時代～平安時代の集落跡は検出されているものの官衙遺構は検出されていない。

以上、神辺平野でのこれまでの発掘調査からみると、備後国府神辺所在説は移動説とともに否定せざるをえない。

府中市街地の調査については本報告書で詳述されているように多数の遺構・遺物が明らかになっており、府中説が次第に明確になってきた。重複するので本文に譲りここではとりあげない。

郡衙・駅家跡等の発掘調査

安那郡の郡衙跡、山陽道に伴う安那駅家がこの地域に存在した可能性は高いが、まだ明らかになっておらず所在地は不明である。国府と同様に地名等から比定した説や、大宮遺跡の北部で国府系瓦が散見することから推定する説もあるが、いずれも遺構は確認されておらず今後の課題である。

品治郡の郡衙跡もまだ不明であるが、駅家についてはかつて廃最明寺跡とされ、近年は地名から中島遺跡（福山市駅家町中島）と呼称される遺跡が品治駅と推定されるようになった。まだ試掘調査のみで発掘による明確な遺構は不明であるが、地名や立地、いわゆる国府系（平城宮式）とされる奈良後期の瓦などからみると寺院跡ではなく品治駅家の可能性が高い。後述のように備後の寺院跡の立地は、ほぼ丘陵を背にした地に造営されており、丘陵上の例はみられないことも指摘できる。

これまでの継続した調査で、備後国府は『和名類聚抄』に記載されたように葦田郡内で明らかになってきたが、葦田郡衙の所在はまだ不明で今後の調査にかかっている。発掘調査が行われた府中市父石町の前原遺跡（父石遺跡）は、長方形の土塁に囲まれ礎石建物が出土しており、葦田駅家跡と推定されている。遺構の全体像はまだ不明であるが、山陽道のルートにあり平城宮式瓦の出土などからの推定で、軍団跡や法倉とする説もあるがこれらの実態が明らかでなく、立地からみれば葦田駅家跡と考えるのが妥当であろう。

2. 備南における寺院跡等の調査

発掘調査された備南の寺院跡

備後国で古代寺院と推定されている遺跡（大半が未発掘のため官衙跡ないしは瓦窯跡が含まれている可能性もある）は約 25 箇所、備後南部が約 20 箇所と圧倒的に多い。備北では 1 郡 1 寺の様相であるのに対し備南では郡に複数の寺跡がみられる。このうち全域ではないが発掘調査が行われ、概要が明らかになっているのは 8 箇所である。東から安那郡の備後国分寺跡・小山池廃寺・中谷廃寺、養老 5 年に安那郡から別れた深津郡の宮の前廃寺、葦田郡の伝吉田寺（元町廃寺）・青目寺跡・栗柄廃寺、御調郡の本郷平廃寺と他地域に比べて調査が進んでいる。地方の古代史研究に寺院跡の調査が果たす役割は大きく、ここでは成果を簡略に整理して備後国府跡研究の側面資料としたい。

数の関係もあり備南地域の寺院跡に限定して検討した。

これまでに発掘調査がなされ報告書の刊行されている寺院跡を整理しておきたい。ただ、完掘された寺院跡はなく大半が部分的な調査で不明な点も多いが、確認された成果と未解決の問題点を要約しておきたい。東部から郡ごと整理してみた。なお、鞆田郡内の伝吉田寺と青目寺については本報告書で詳細に取り上げているので、ここでは簡略に記した。

備後国分寺跡（福山市神辺町） 旧安那郡。1972～1975年度、4次にわたって広島県教育委員会が調査。塔・金堂跡・東と南面の築地跡を発掘。伽藍配置は塔跡・金堂跡が東西に並列しており、講堂跡と回廊跡は検出されていないが、法起寺式配置と推定。寺院は南面して背後に丘陵を背負っている。塔・金堂の推定中軸線から東90.3mで築地跡を挟んで内外の溝が検出されており、寺域の東限と考えることができる。中軸線から西に折り返すと堂々川の堤防下に入り調査はできず確認されていない。川の西方に東西トレンチを入れているが、築地跡は検出されていないので、寺域の東西は180m(600尺)と推定される。南北は北面が検出されていないが、東西と同じ600尺四方か、南北がやや長く現国分寺の門前に納まる可能性もある。金堂の規模は東西約30m×南北20mで、塔は一辺約18mである。ただ、いずれも基壇化粧は残っておらず明確な大きさではないが、塔跡は大きく七重塔と推定される。

発掘調査では軒丸瓦9形式、軒平瓦9形式が明らかになっている。出土点数からみると重圈文と重廓文のセットが創建期の瓦であろう。平城宮式瓦のセットも数形式あり、備南の各地に分布している。奈良後期～中世にわたる。

小山池廃寺（福山市神辺町） 旧安那郡。1977～1978年度、3次にわたって広島県教育委員会が調査。塔・金堂・講堂跡・瓦窯跡を発掘。塔の基壇は一辺13.2mで、基壇高は2.2mと高い。東方の基壇は東西15.6m以上×南北15.6mで金堂跡と推定される。塔西方の建物は東西32.4m×南北14.4mで東西に長大な基壇で礎石が残存しており講堂跡と推定される。3基壇の南面は一直線に並んでいる。塔・金堂の背後の丘陵裾から瓦窯跡が出土し、回廊・講堂のスペースはない。このため講堂を塔の西に配したのであろう。回廊は検出されず、特異な伽藍配置である。前面の小山池に礎石が残存していると云われ、或は門跡の遺構かもしれない。外郭の築地は検出されていないが、地形等からみて約1町四方と想定される。伽藍配置は3堂塔が東西に並列した例のない配置である。

発掘では軒丸瓦10形式、軒平瓦9形式が出土している。出土点数からみると藤原宮式のセットが創建瓦と考えられる。この他軒丸瓦には大型の細弁文軒丸瓦や法隆寺式、平城宮式瓦など多様である。軒平瓦は重弧文や平城宮式瓦などが出土。奈良前期末～平安時代にわたる。

中谷廃寺（福山市神辺町） 旧安那郡。1978年度に神辺町教育委員会が緊急調査で塔・講堂跡・西限の溝を発掘。塔跡基壇は一辺11.7m、講堂跡は東西21.1mであるが南北は未調査で不明。伽藍配置は金堂跡が未調査であるが、塔の東に想定して法隆寺式と推定される。主要伽藍の背後は丘陵で東西ともに尾根に囲まれた東西90m、南北70mの窪地に位置しており、寺域はこの自然地形に規定されている。なお、西側に張り出した尾根の裾に南北の溝が検出され、西を区画する溝と考えられる。これにより回廊と外郭の築地は設けられていなかったことが判る。

出土瓦は軒丸瓦が6形式である。やや大振りで花卉が長く特徴的な10弁複弁文瓦と、細長い花卉の中央がやや凹み稜線が入った素弁8弁文の数種、いずれも瓦当面裏に布目が付く特異な瓦である。

第10章 備後国府の検討

また、備南に分布する平城宮式瓦がある。軒平瓦 3 種で四重弧文が大半を占め、三重弧文と平城宮式と推定される唐草文瓦も出土している。素弁 8 弁の有稜素弁文は芸備周辺には例がなく、瓦当面裏の布目ともにその系譜が注目される。組み合わせる軒平瓦は典型的な重弧文である。出土点数から見ると平城宮跡式軒丸瓦が多い。奈良前期～奈良後期である。

宮の前廃寺（福山市蔵王町） 旧深津郡。1950・1951 年度に広島県史跡調査会、1967 年度に広島県教育委員会調査、1976 年に史跡整備にともない市教委が調査。東に塔跡、西に金堂跡を検出。塔・金堂の背後はすぐ丘陵が立ち上がり、この位置に講堂・回廊の建立は不可能である。金堂跡は東西 25.3m × 南北 15.5m、塔跡は一辺 12.6m で共に埴積基壇で周辺に類例はなく注目される。金堂・塔の基壇間は 14.5m。回廊・講堂はないが、法起寺式に類似した配置と云える。

軒丸瓦は 8 形式、軒平瓦は 9 形式である。栗柄廃寺と同範の藤原宮式の軒丸・平のセット、平城宮式やその変種、軒丸の外縁に唐草の入ったもの、小型で退化したと考えられる重圈文瓦など多様である。また、人名をヘラ書きした文字瓦が 7 点出土している。女性名が多く尼寺との推定もあり注目される。奈良前期末から平安時代にわたる。

なお、品治郡では正式に発掘調査された寺院跡はないが、**慶徳寺廃寺跡**（福山市新市町）が知られている。大正 3 年の鉄道工事中に塔跡が破壊され明らかになった。伽藍配置は不明であるが、造り出しのある心礎や礎石が出土し付近の長神社や民家に保存されている。出土瓦に中房が小さく素弁 7 弁で弁間に珠粒が配された小振りの瓦が出土しており、豊元国は飛鳥時代としている。高句麗式瓦とも云えるもので古式である。1 点のみで外縁が残っておらず不明な点もあるが、備後で最古の可能性がある。その他には法隆寺式軒丸瓦と類似した複弁文、平安初期の軒丸・軒平瓦が出土している。今後の調査が期待される。

伝吉田寺跡（府中市元町） 旧葦田郡。1942 年に豊元国による試掘調査。法起寺式伽藍配置を推定、広島県史跡に指定。1968 年に広島県教育委員会が緊急発掘調査。塔・講堂跡を発掘、基壇はいずれも乱石積基壇で、塔跡の基壇は一辺 14.50m。講堂跡は東南隅が検出されたが、規模は不明である。塔の規模と回廊との関係から、金堂跡（未調査）は南北棟と推定されている。回廊跡と寺域の規模は遺構の確認ができておらず明確でないが、地形から見ても大規模であろうと予想される。

軒瓦は本報告書に詳述されている。典型的な川原寺式と藤原宮式の軒丸瓦で注目される。軒平瓦には重弧文はなく忍冬文であるが、その遡源が注目される。備南に分布する平城宮式軒平瓦も出土している。奈良前期～平安時代にわたる。

栗柄廃寺（府中市栗柄町） 旧葦田郡。1984・1985 年度調査、2 次にわたり府中市教育委員会が遺構確認調査。トレンチ調査が行われ柱穴等は検出されているが、主要堂塔などの明確な遺構は検出されていない。寺院に関連した地名はあるが、寺域、伽藍配置は全く不明である。江戸時代から国分尼寺とする説があったが、根拠は不明である。出土瓦が藤原宮式瓦で時期的に無理がある。

軒丸瓦は 2 形式、軒平瓦 1 形式である。藤原宮式軒丸瓦は伝吉田寺と同範と別範もある。軒平瓦は模倣し変化している。また、花卉に稜線と凹線が交互に配された素弁文瓦も出土している。奈良前期末～奈良後期と考えられる。

青目寺跡（府中市本山町） 旧葦田郡。1966・1968 年府中高校による確認調査。1995～2003 年度府中市教育委員会確認調査。市街地北方亀ヶ岳の七つ池周辺の遺跡。南北約 1 km、東西 700m

年度府中市教育委員会確認調査。市街地北方亀ヶ岳の七つ池周辺の遺跡。南北約1km、東西700mに分布する平坦地を北・中・西・東・南御堂地区として調査。平坦面と石垣が検出されている。礎石建物は中御堂・西御堂・東御堂などで確認されているが規模等の詳細は今後の調査が必要である。出土遺物から平安時代の山上伽藍跡といえる。なお、下手の現青目寺の小調査も行われ、古代末には山上青目寺の一坊であったと推定されている。

本郷平廃寺（尾道市御調町） 旧御調郡。1977年広島県教育委員会による試掘調査。1985～1988年度、御調町教育委員会が4次調査にわたり調査。塔・金堂跡を確認。講堂跡は未確認。塔・金堂跡ともに自然石の礎石が元位置を保っている。金堂跡は東西15.6m×南北13.2m、塔跡は一辺9.55mで比較的小規模である。心礎の上に方形で中央に貫通した穴にある石が保存されており石製露盤の可能性もある。また、唐居敷も残存している。伽藍配置は塔跡・金堂跡が南北に並び、講堂跡・回廊跡・築地跡等は検出できず、講堂はなかった可能性が高い。寺域の規模は築地跡が検出されていないがほぼ一町四方と推定される。伽藍配置は、金堂の背後に講堂がないが四天王寺式に類似した配置と推定。

出土瓦は軒丸瓦3形式、軒平瓦1形式である。創建瓦は複弁文の川原寺式の範疇に入るいわゆる石川寺式で、周縁に3重圈文が廻るもので5種に分けられる。これに伴う軒平瓦は出土していない。備南に分布する平城宮式のセットも少数出土している。奈良前期後半～奈良後期である。

備南寺院跡の特徴

以上、発掘調査が行われた寺院跡の概要をまとめてみた。全域の発掘が行われていないため不明な点も多いが、要約整理してみると次のような特徴が浮かび上がる。寺院の立地を見ると丘陵の裾に南面して建立されている。また寺域はほぼ1町四方程度であるが、備後国分寺跡は600尺(180m)で広く、伝吉田寺も明確ではないが広い可能性がある。伽藍配置は多様で塔を東にした法起寺式類似の配置が多く、四天王寺式、法隆寺式に類似した配置が見られる。回廊跡・講堂跡の不明な寺院もあり、小山池廃寺のように例のない配置も見られる。中央寺院のように七堂伽藍の整ったものではなく、金堂・塔のみの寺院の存在も考えられる。堂塔の規模を見ると備後国分寺が大きく、特に塔の18mは飛抜けており七重塔と考えられる。伝吉田寺の塔も他寺に比べて大きく、金堂・講堂の規模は不明だが同様に大きく大寺であったことが想定される。果して国府寺と呼ばれる寺であったかはともかく、府中国府と関連した寺院であろう。備後国分寺が府中ではなく神辺に建立された理由とも考えられる。

なお、国分尼寺については、現段階では確定できる寺院跡はなく、国分寺の西500mにある小山池廃寺が転用されたと考えられている。既述のように小山池廃寺は奈良前期の建立で塔もあり疑問もあるが、奈良後期の瓦も出土しており他に適当な比定地もなく転用尼寺の可能性はある。

この他発掘調査は行われていないが、法隆寺式の複弁文軒丸瓦が内砂子遺跡や川谷遺跡から出土し、小山池廃寺でも出土している。内砂子遺跡は崖面に登窯の断面が出ており、蓮華文のついた珍しい棟先瓦も出土している。川谷遺跡も地形から見て瓦窯跡であろう。深津郡には法隆寺の荘園があり関連が推定されている。なお、備南で瓦窯跡と推定される遺跡は、トレンチ調査された岡遺跡で、備南に広く分布する平城宮式瓦が出土している。寺院跡とは考えられず、窯体は出土していないが瓦窯跡であろう。

第10章 備後国府の検討

ところで、安那郡の木之上遺跡や塔谷遺跡など丘陵上から平安時代の瓦が出土しており、山林寺院と推定される。品治郡でも市場廃寺・廃法成寺跡なども平安期の瓦が出土している。これら平安期寺院跡の調査は全く行われておらず今後の課題である。

年代の基準になる軒瓦は、慶徳寺廃寺の高句麗式が飛鳥時代の可能性があるが検討の余地もある。奈良前期の瓦としては伝吉田寺の川原寺式、ついで本郷平廃寺の石川寺式、藤原宮式、法隆寺式と中央大和の様式が伝播している。この他に中谷廃寺の有稜素弁文があり、製作技法とともに特異な点で注目される。奈良後期には国府系瓦と呼ばれている平城宮式の瓦が広く分布している。中央の瓦様式が伝播しているが、近隣の備前・備中国や安芸国とも異なっている。天智・天武朝の瓦がいち早く導入されていることは、まだ位置は確定していないものの常城との関連も想定でき、奈良後期の平城宮式瓦の分布や、平安時代の山林寺院である青目寺も備後国府の重要さを語っているとも考えられる。なお、深津の市に建立された宮の前廃寺は、埴積基壇と多数の文字瓦の出土など特異な存在である。備後国への海路の入口となり、内海の航路と関連した重要な位置に建立された寺院である。最近この文字瓦を知識の瓦とした研究が見られる。埴積基壇の来歴と共に検討したいが、スペースの関係でまたの機会としたい。

3. 備南の発掘遺跡からみた備後国府

これまでに発掘調査が行われた遺跡の概略を紹介してきた。ここでは発掘成果を検討し備後国府について考えてみたい。

まず、神辺平野の国府説であるが、現段階では否定せざるをえない。先に紹介したように大宮遺跡では高垣説の方八町比定地を発掘したが国府に関連する遺構は検出できなかった。その後の町教委や県埋文センターによる大宮地域や御領地域での調査でも国府跡や官衙跡と推定できる遺構は検出されていない。また、最近の井原線に伴う(財)広島県教育事業団の継続調査でも官衙跡をうかがわせるものは出土していない。勿論広い平野部にはまだ未調査地も多く、断定はできないが可能性は低い。

次に寺院跡の調査からみた国府であるが、直接国府跡に結びつくわけではないが、これまでの調査で伝吉田寺跡が府中国府と密接な関連があったことは明白である。伝吉田寺跡の調査がまだ部分的で不明な点も多いため他寺との比較も難しいが、規模的には塔跡の規模から見て国分寺に継ぐ大寺であったことがわかる。出土瓦が優美な川原寺式と藤原宮式の典型的な瓦で、時の中央政権との結びつきをうかがわせる。伽藍配置は他例から見れば金堂が東西棟の法起寺式と考えられるが、もし想定されているように金堂が南北棟であれば、官寺である太宰府観世音寺・下野薬師寺や多賀城廃寺と同じ配置となる。また、観世音寺の瓦は伝吉田寺と同じ川原寺式と藤原宮式瓦であり、その位置付けを再検討することも必要であろう。立地・規模や建立時期などからみても、備南の中心的寺院であったことは明白で、国府と関連して重要な位置を占めていた寺院と云うことができる。

おわりに

備後南部地域における古代遺跡の発掘調査はまだ少なく、その解明は今後の調査の進展にかっている。ただ寺院跡の調査については比較的進んではいるが、それでもトレンチによる部分的な調査

で全容の解明には至っていない。特に伝吉田寺跡の寺域と伽藍配置の調査が必要である。備南で未調査ながら瓦の出土地は多数知られており、今後調査が行われれば官衙跡や寺院跡、瓦窯跡などが明らかになるであろう。小文はこれまでの発掘成果から備後国府跡について検討し、継続して調査が行われ多くの成果がみられる府中市市街地の地下に埋もれた遺跡が国府跡であると位置づけた。ただ、市街化が進み広大な地域のため調査は困難を極めている。今後の地道な調査の継続でさらに大きな成果があがり、埋もれた国府跡の全容が明らかになるであろう。古代の備後国を解明する重要な鍵であり、大きな期待が寄せられている。

【主要参考文献】

＜神辺地域国府関連研究＞

- 高垣不敏 1953『備後国府考』 深安郡教育研究所
 豊元国 1954「備後国府考」『芸備地方史研究』5・6合
 松下正司・鹿見啓太郎 1975「神辺方八町の調査」『草戸千軒町遺跡』ニュース17・19
 篠原芳秀 1980「大宮遺跡と安那駅」『芸備』10

＜神辺地域の発掘調査報告＞

- 広島県教育委員会 1978～1982『大宮遺跡第④次発掘調査概報』1～5次 広島県教育委員会 1978～1982
 広島県埋蔵文化財調査センター 1985・86, 1988『大宮遺跡発掘調査報告書』兼代, 九反田
 広島県教育委員会 1976, 1978『神辺御領遺跡第④次発掘調査概報』1～2次
 広島県教育委員会・埋文センター 1981『神辺御領遺跡－国鉄井原線建設に係る発掘調査報告書』
 神辺町教育委員会 1982～2006『神辺町埋蔵文化財調査報告』1～29
 広島県教育事業団 2012～2015『国道313号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－御領遺跡－』1～3

＜備南地域の寺院跡・出土瓦研究＞

- 村上正名 1963「備南の主要寺院跡」『福山市史』上
 村上正名 1966「備後国分寺」『神辺町文化財報告書』2
 松下正司 1977「仏教文化の受容」『古代の地方史』2
 松下正司 1993～1994「古瓦を読む」1～55『中国新聞』夕刊連載
 松下正司 1997「備後国分寺・国分尼寺・国府」『新修国分寺の研究』7
 高橋美久二 1990「山陽道古瓦の系譜」『新修国分寺の研究』4
 妹尾周三 1998「備後南部地域の「藤原宮式」軒瓦について」『文化財論究』1
 妹尾周三 2002「古瓦から見た古代寺院」『芸備』30
 妹尾周三 2004「古代寺院研究の現状と課題」『芸備』31
 湊哲夫・亀田修一 2006『吉備の古代寺院跡』吉備人出版
 土井基司 2007「古代山林寺院「青目寺」の調査」『広島県文化財ニュース』194
 近藤康司 2014『行基と知識集団の考古学』清文堂
 神辺郷土史研究会 1980「神辺の古代寺院跡」「神辺の歴史と文化」7

＜備南寺院跡発掘報告書＞

- 広島県教育委員会 1967『備後工業整備特別地域埋蔵文化財調査概報』
 広島県教育委員会 1968『伝吉田寺跡発掘調査概報』
 府中高等学校生徒会地歴部 1968『青目寺跡の調査報告』
 岡遺跡発掘調査団 1972『岡遺跡発掘調査報告書』
 広島県教育委員会 1973～1976『備後国分寺跡発掘調査概報』1～4次
 福山市教育委員会 1977『史跡宮の前廃寺跡』
 広島県教育委員会 1977, 1979『小山池廃寺発掘調査概報』1～3次
 神辺町教育委員会 1981『備後中谷廃寺』
 御調町教育委員会 1989『本郷平廃寺』
 府中市教育委員会 2004「青目寺ほか」『府中市埋蔵文化財調査報告』8
 府中市教育委員会 2011「栗柄廃寺の発掘調査」『府中市埋蔵文化財調査報告』23

＜府中地域の国府・官衙等発掘調査報告書＞

本報告書の第1分冊に挙げられているので、ここでは省略した。